

文部省『師範器楽 本科用巻一』(1943)の特質 —— 真篠俊雄編『改訂初等オルガン教科書』 (1930)との比較から ——

鈴木 慎一郎

1. はじめに

本稿の目的は、文部省『師範器楽 本科用巻一』(1943)の特質を明らかにすることである。なお、本稿は、筆者が2006年1月に兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科に提出した博士学位論文「昭和前期の師範学校における音楽教育実践に関する史的研究」の第Ⅱ部第4章第4節に該当するものである。

師範学校が官立専門学校程度へと昇格する1943(昭和18)年には、「師範学校教科教授及修練指導要目」(1943)に基づき、国定教科書の文部省『師範器楽 本科用巻一』が作成される¹。

編纂の様子については、木村信之が橋本清司に行ったインタビューの中で以下のように記されている²。

橋本：それから『バイエル』流の、オルガン・ピアノ教則本もできたんです。

木村：オルガンやピアノ用の教則本ですか。

橋本：ええ、当時はできるだけわが国の教材でという考えなんです。高折先生もついていたから、できた曲をいちいちひいて、「これは使える」「使えない」とやっ

(中略)

木村：それはぜひ見たいものですね。その教科書の曲は、どういう先生がおつくりになったのですか。

橋本：ほとんど他には依頼せずに、委員の先生がおおかたやってしまったと思っています。でも若干はほかに頼んだかもしれない。

1943(昭和18)年の「師範学校音楽科講習会」では、高折宮次が「器楽及伴奏ニツイテ」の科目を担当し³、木村のインタビューとも重なる。したがって、『師範器楽 本科用巻一』の編纂は、高折が中心となって行ったと考えられる。

しかし、『師範器楽 本科用巻一』には「緒言」に当たる文章がないため、編纂趣旨は明らかでない。

表2は、『師範器楽 本科用巻一』における練習曲、76曲についての調性、拍子、小節数、発想標語、形式、シンコペーションの有無、音域、作曲技法の分類、分散和音の有無について一覧にしたものである。なお、作曲技法の分類については、表1に示すように行った。作曲技法の分類の方法は、山本文茂の国民学校「芸能科音楽」教師用指導書の伴奏譜に対する分類方法を参考とした⁴。

表1 作曲技法の分類の方法

i	コラール風
ii	分散和音
iii	右手：旋律，左手：和音
iv	ユニゾン
v	バッテリーリズム
vi	その他

注 バッテリーリズム…あるリズムフレーズを二つのパートに分けて表現する形。野球の投手と捕手が互いにボールをやり取りしている感じをなぞらえている(『小学生の音楽2 指導書研究編』教育芸術社、2002年、37、52頁)。

表2 『師範器楽』の音楽的特徴

番		調性	拍子	小節数	発想標語	形式	シン ペーション	音域	作曲技法 の分類	分散 和音
3	両手練習	C	4/4	9		1		c1-g2	iv	
4		C	4/4	11		1		c1-g2	iv	
5		C	3/4	11		1		c1-g2	iv	
6		C	4/4	8		1		c1-g2	iv	
7		C	4/4	8		1		c1-g2	vi	
8		C	4/4	8		1		c1-g2	vi	
9		C	3/4	8		1		c1-g2	vi	
10		C	4/4	8		1		c1-g2	vi	
11		C	4/4	8		1		c1-g2	ii	○
12		C	4/4	16		2		c1-g2	ii	○
13		C	3/4	16		2		c1-g2	vi	
14		C	4/4	16		2		c1-g2	vi	
15		C	4/4	16		2		c1-g2	vi	
16		C	3/4	16		2		c1-g2	vi	
17		C	4/4	16		2	○	c1-g2	vi	
18		C	4/4	16		2		c1-g2	vi	
19		C	4/4	16		2		g-g2	ii	○
20		C	4/4	16		2		g-g2	vi	
21		C	4/4	15		2		g-g2	vi	
22		C	3/4	24		3		h-g2	ii	○
23		C	2/4	16		2		h-g2	ii	○
24		C	3/4	16		2		h-g2	ii	○
25		C	4/4	20		3		h-g2	ii	○
26		C	6/8	24		2		h-g2	ii	○
27		C	4/4	24		2		h-g2	ii	○
28		C	4/4	16		2		h-g2	ii	○
29		C	2/4	16		2	○	g-g2	ii	△
30		C	4/4	20		3		g-g2	ii	○
31	ハ調長音階	C	4/4	11		1		c-c2	vi	
32		C	4/4	11		3		c-c2	vi	
33		C	4/4	14		3	○	c-c2	vi	
34		G	3/4	16		2		g-e2	vi	
35		C	2/4	16		2		c-c2	vi	
36		C	4/4	11		3	○	c-d2	vi	
37		C	3/4	15		2		c-c2	vi	
38		C	4/4	11		1		c-c2	vi	
39		G	3/4	16		2		g-e2	ii	○
40		G	3/4	64		2		g-g2	ii	○
41		C	4/4	8		1		c1-d3	iv	
42		G	4/4	12		3		g-d3	ii	○
43		G	3/4	20		2		g1-d3	vi	
44		C	4/4	12		3	○	c-a1	vi	
45		C	3/4	12		1	○	c-f2	vi	

46		C	2/4	24				h-d 3	ii	○
47	(イ短調)	a-m	4/4	13		3	○	A-a 1	vi	
48	(イ短調)	a-m	3/4	16		1		e-g 2	ii	○
49		C	2/4	20		2		H-c 2	iii	
50	ト調長音階	C	2/2	8		2		G-a 2	vi	
51		G	2/2	7		1		c-e 2	vi	
52		G	3/4	16		1		f-h 2	ii	○
53	(ホ短調)	e-m	4/4	5		2		dis-e 2	iii	
54	(ホ短調)	e-m	4/4	6		1		e-e 2	vi	
55		e-m	6/8	24	やはらかに	1	○	E-h 2	vi	
56	ヘ調長音階	F	3/4	16		3		e-a 2	vi	
57		F	4/4	7		2		A-d 2	iii	
58		F	3/4	14		1		e-a 2	iii	
59		F	4/4	23	早く楽しく	3		E-a 2	ii	○
60		F	6/8	24	静かに	3		c-c 3	ii	○
61	(ニ短調)	d-m	4/4	8		2	○	cis-e 2	vi	
62		d-m	3/4	15	楽しく	1		cis-f 2	ii	△
63		d-m	2/4	20	歯切れよく	3		H-e 2	vi	
64	ニ調長音階	D	4/4	16		2	○	G-d 2	ii	△
65		D	3/4	24		2		d-h 2	vi	
66		D	2/4	24	軽快に	3	○	c-h 2	vi	
67		D	3/4	25		3	○	cis-e 3	ii	○
68	(ロ短調)	h-m	6/8	12	静かに	3		Fis-d 2	vi	
69		h-m	4/4	17	早く	3	○	f-h 2	vi	
70		B	4/4	12		2	○	A-es 2	vi	
71	変ロ調長音階	B	3/4	27	早く楽しく	3	○	B-f 2	ii	△
72	(ト短調)	g-m	4/4	16		3	○	G-g 2	vi	
73		g-m	6/8	18	軽く	2		G-a 2	ii	○
74		C	3/4	24	軽快に	2	○	G-a 2	ii	△
75		G	4/4	16	静かに	3		G-d 2	ii	○
76		e-m	3/4	41	軽快に	2	○	H-c 3	ii	○
77		G	4/4	82	活発に	3	○	G-c 3	vi	
78		F	2/4	24	軽快に	3	○	c-c 3	ii	○

注 音域：c1=一点ハ音。c=かたかなハ音。c=ひらがなハ音。

表2の分析を通して、音楽的特徴をまとめると、次の通りである⁵⁾。

- 1) 調性：ハ長調 40 曲 (52.6%)，ヘ長調 7 曲 (9.2%)，ト長調 6 曲 (7.9%)，ニ長調 5 曲 (6.6%)，ホ短調 4 曲 (5.3%)，ニ短調 4 曲 (5.3%)，変ロ長調 3 曲 (3.9%)，ロ短調 3 曲 (3.9%)，イ短調 2 曲 (2.6%)，ト短調 2 曲 (2.6%)。

これらの調性はすべて国民学校「芸能科音楽」で指導される範囲内である。ただし、国民学

校「芸能科音楽」で重要視された日本音階でできた曲については『師範器楽 本科用巻一』の中で使用されていない。

- 2) 拍子：4/4 が 39 曲 (51.3%)，3/4 が 22 曲 (28.9%)，2/4 が 8 曲 (10.5%)，6/8 が 5 曲 (6.6%)，2/2 が 2 曲 (2.6%)。「師範学校教科教授及修練指導要目」で示されていない 2/2 も含まれている。

- 3) 小節数：小節数には反復する小節も含めている。5～82 の構成で、16 小節でできた曲が

21 曲 (26.9%) でもっとも多い。

- 4) 発想標語：15 曲に日本語の発想標語が付いている。しかし、イタリア語の発想標語を和訳したものにはすぎない。「軽快に」が 4 曲 (5.3%) でもっとも多い。なお、『師範音楽 本科用巻一』の歌曲で使用されていた発想標語と比較すると、両教科書で共通しているものは、「軽快に」「静かに」である。

『師範音楽 本科用巻一』で使用されていた「元気よく」「力強く」「勇敢の心で」等の発想標語は、『師範器楽』ではみられない。

- 5) 形式：『バイエルピアノ教則本』同様、一部形式、二部形式、三部形式によって占められている⁶。最初から 11 番までは一部形式、その後、二部形式、三部形式が加わっている。

- 6) その他：三連符は使用されていない。

なお、シンコペーションの有無、音域、作曲技法の分類、分散和音の有無については、次項以降、考察を進める中で取り上げたい。

2. 真篠俊雄編『改訂初等オルガン教科書』(1930)と『師範器楽 本科用巻一』(1943)との比較

『師範器楽 本科用巻一』は、本科第 1 学年向けの教科書であるので、「師範学校教科教授及修練指導要目」(1943)の以下の規定に基づいて作成されている⁷。

器楽ハ「ピアノ」又ハ「オルガン」ノ奏法ヲ習得セルモノト然ラザルモノト二分チテ之ヲ授ケ前者ハ予科修了程度ニ準ジテ次第二其ノ程度ヲ進メ後ハ初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度マデ進マシム、

ここで問題となるのは、『師範器楽 本科用巻一』(以下、『師範器楽』と略記)が、「予科修了程度ニ準ジテ次第二其ノ程度ヲ進メ」る内容なのか、それとも「初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度マデ進マシム」内容なのかということである。また、『師範器楽』が、ピアノ用教科書なのかオルガン用教科書なのか、はたまた、両者を併用した

教科書なのかを明確にすることも重要な点であると思われる。

そこで、ここでは上記の疑問を解決するために、『師範器楽』(1943)と『改訂初等オルガン教科書』(1930)との比較を行う。『改訂初等オルガン教科書』(以下、『初等オルガン教科書』と略記)を比較対象としたのは以下の理由である。

- 1) オルガンを専門とする東京音楽学校教授、真篠俊雄が編集した教科書である点。実際に真篠俊雄は、東京音楽学校甲種師範科の生徒にもオルガン指導を行っていたため、卒業後、師範学校の音楽科教員になる生徒にも影響を与えたと考えられる⁸。
- 2) 高折宮次と真篠俊雄との間に密接な関係がうかがえる点。実際に 1936 (昭和 11) 年に高折・真篠共編で『初等ピアノ・オルガン教科書』(昭和 11 年 11 月 30 日、文部省検定済)が発行されている⁹。
- 3) 『初等オルガン教科書』が多くの師範学校で使用されたと考えられる点。この教科書は京都府師範学校の 1931 (昭和 6) 年度教科用図書として列記されている¹⁰。また、聞き取り調査によると、香川県師範学校でも使用されていた¹¹。

『初等オルガン教科書』は、1930 (昭和 5) 年、真篠俊雄によって編集された文部省検定済師範学校音楽教科書である (昭和 5 年 12 月 20 日、文部省検定済、師範学校・高等女学校音楽科用)。『初等オルガン教科書』の「緒言」は以下の通り。これを読むと、真篠の『初等オルガン教科書』は、1905 (明治 38) 年発行の天谷秀・多梅稚編『初等オルガン教科書』(明治 38 年 2 月 7 日、文部省検定済)を基に、島崎赤太郎らの影響を受けて作成されたことが分かる。

緒言

- 一、本書は師範学校高等女学校其他同一程度の学校のオルガン教科書に充てんがために編纂したるものなり。
- 二、本書の材料は唱歌教授との連絡を計らんがために難解なる楽曲を避け専ら簡易にして高

尚而も趣味深き歌詞的のものを主として選択せり。

三、本書は実地教授上の便利を計り楽曲の排列及び順序等特に意を用ひたれども多少の変更は教授者の任意とす。

四、本書は大別して第一部を予備練習及二重音曲第二部を三十音及び四十音曲に分つ。

五、本書は故天谷秀並びに多梅稚兩氏の編纂せる初等オルガン教科書を基礎となし之れに修

正を加へて編纂せり。

六、本書を編するに當り恩師島崎赤太郎並びにワルターフィッシャーの兩先生に謹しんで感謝の意を表す。

編者識

各教科書の概要については表3に示した(図1, 図2)。

表3 『初等オルガン教科書』と『師範器楽』

著名	『改訂初等オルガン教科書』	『師範器楽 本科用巻一』
年	1930(昭和5)年	1943(昭和18)年
著・編者	真篠俊雄編	文部省
教科書	文部省検定済教科書	文部省国定教科書
発行	大阪開成館	師範学校教科書株式会社
ページ数	55 ページ	54 ページ
備考		同時期に『師範音楽 本科用巻一』が発行。

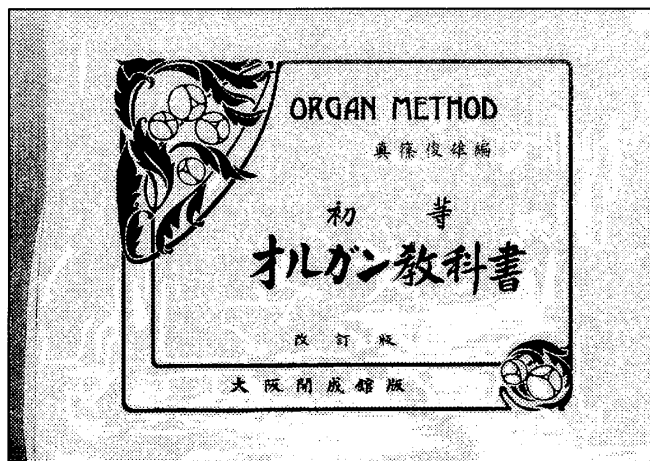


図1 『初等オルガン教科書』表紙

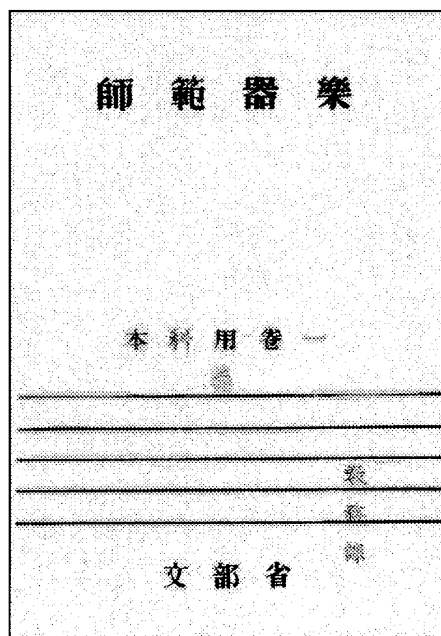


図2 『師範器楽』表紙

表4は、教科書の内容構成を表す¹²⁾。『初等オルガン教科書』は、「単音複音練習」や「スタッカート練習」といった演奏技術を項目に立てて編纂されている。それに対し、『師範器楽』では「ハ調長音階」に始まって「変ロ調長音階」というよう

に音階別に編纂されている。音階について『初等オルガン教科書』では「ハ調長音階」「と調長音階」「ヘ調長音階」の3種類しか項目には挙がっていない。

表4 教科書の内容構成

『初等オルガン教科書』 真篠俊雄 (1930)		『師範器楽』 文部省 (1943)		参 考	
				『オルガン教則本』 巻 島崎赤太郎 (1899)	『バイエルピアノ教則 本』 萩原英一 (1924)
p.	第一部	p.		p.	
1	踏板練習			1	17 右手練習
	右手練習	3	右手練習		21 左手練習
	左手練習	4	左手練習	2	25 両手練習
2	両手練習	5	両手練習	3	44 八分音符の練習
8	五指練習			5	54 ハ長長音階
	左手練習			6	55 複音練習
10	増音器練習	17	ハ調長音階 (イ短調)	9	56 ト調長音階
12	は調長音階	28	ト調長音階 (ホ短調)	12	58 三連音符
14	と調長音階	31	ヘ調長音階 (ニ短調)	16	59 ニ調長音階
16	ヘ調長音階	36	ニ調長音階 (ロ短調)		61 イ調長音階
		41	変ロ調長音階 (ト短調)	17	63 ホ調長音階
18	五指練習			19	67 各音符の音長練習
	第二部			22	70 イ調短音階
19	単手複音練習			26	72 ヘ調長音階
21	スタッカート練習			30	74 変ロ長調
22	換指練習			33	80 半音階
46	音階	52	終止形の練習		83 指の練習
50	附録	54			89
55					

注 『初等オルガン教科書』と『師範器楽』で重複する項目には下線を付した。

しかし、表5に示した通り、『初等オルガン教科書』に掲載されている練習曲の調性は、『師範器楽』よりも多様である。一方、『師範器楽』では、「ハ調長音階」「ト調長音階」「ヘ調長音階」「ニ調長音階」「変ロ調長音階」とそれぞれの平行調を扱っている。前述の通り、これらはすべて国民学校「芸能科音楽」で指導される範囲内である¹³。

表5 使用されている調

	『初等オルガン教科書』 全 87 曲		『師範器楽』 全 76 曲	
	%	曲	%	曲
C	46.0	40	52.6	40
F	9.2	8	9.2	7
G	12.6	11	7.9	6
D	4.6	4	6.6	5
e	1.1	1	5.3	4
d	1.1	1	5.3	4
B	3.4	3	3.9	3
h	2.3	2	3.9	3
a	2.3	2	2.6	2
g	2.3	2	2.6	2
A	4.6	4	0	0
Es	3.4	3	0	0
fis	1.1	1	0	0
c	1.1	1	0	0
E	1.1	1	0	0
cis	1.1	1	0	0
as	1.1	1	0	0
f	1.1	1	0	0

また、『初等オルガン教科書』では、附録として儀式唱歌が掲載されていたり¹⁴、練習曲の中でも『小学唱歌集』の旋律¹⁵が使用されていたりといった初等教育との教材の関連が一部みられた。しかし、『師範器楽』は、木村が行ったインタビューでも話題になった通り、新作の練習曲によって構成され、国民学校の教材等は一切掲載されていない。

なお、低音部譜表が練習曲全体のどの部分で登場するかを示したのが、図3である。『師範器楽』は、最初は右手左手とも高音部譜表を用い、31番で初めて低音部譜表が登場する。全練習曲の39.7%の地点で切り替わり、『バイエルピアノ教則本』より早いところで、低音部譜表が使用されている。

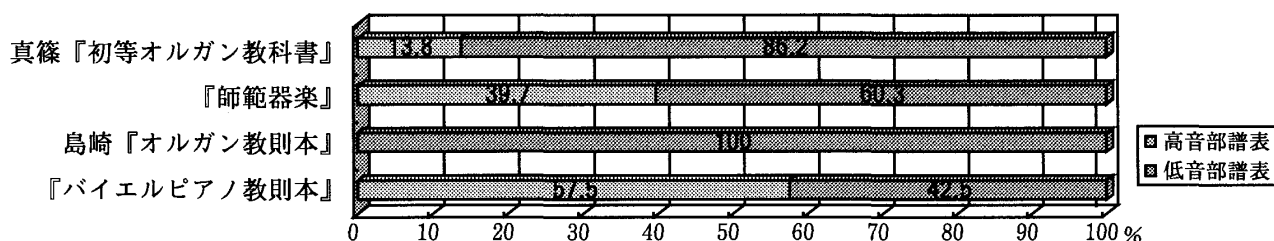


図3 全練習曲に占める低音部譜表導入の位置

これ以降、次の視点に基づき比較を進める。

視点1：『師範器楽』は、「初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度」の教科書か否か。

視点2：『師範器楽』は、ピアノ用の教科書か否か。

(1) 視点1：「初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度」の教科書か否か

両教科書が初学者用か否かを明らかにするために、教科書の導入部分の比較を行う。

譜例1の『初等オルガン教科書』では、「踏板練習」から始まり、「右手練習」「左手練習」と続き、「両手練習」へと展開していく¹⁶。最初の「踏板練習」ではいきなり和音が使用されているため、初心者の生徒にとって難解である。しかし、その後の「右手練習」「左手練習」は換指の技術を必要としないため、無理なく練習することができたと考えられる。

一方、譜例2の『師範器楽』では「右手練習」から始まり、「左手練習」「両手練習」へと展開されていく。『初等オルガン教科書』の「右手練習」では2曲しか練習曲が掲載されていなかったのに対し、『師範器楽』では12曲掲載されている。同

様なことは「左手練習」でもいえ、導入として一定量の練習曲が確保されている。なお、『師範器楽』では、3、4ページに限ったことではあるけれども、「ハニハ」のように音名が音符の下に付記され、当時重要視された聴覚訓練の影響を垣間見ることができる。

このように両教科書とも、練習曲が、「右手練習」「左手練習」から「両手練習」へと配列され、『バイエルピアノ教則本』や島崎赤太郎『オルガン教則本』等の入門書とも共通する編纂方法である。したがって、『初等オルガン教科書』『師範器楽』ともに初学者用の本科第1学年用の教科書である。

次に『師範器楽』が、「師範学校教科教授及修練指導要目」の「予科二年修了程度マデ進マシム」内容に到達していたかどうか検討をしたい。「師範学校教科教授及修練指導要目」においては、予科第2学年は、「前学年ニ於ケル教授事項ニ付程度ヲ進メテ練習セシム」とスモールステップの原理が採られている。さらに以下の点が書き加えられている。

拍子 複合拍子ヲ加フ
律動 切分音・三連符ヲ加フ

表2で示した通り、『師範器楽』の練習曲には三連符は使用されていないものの、複合拍子である6/8拍子が5曲あり、20曲でシンコペーションが用いられているので、予科第2学年の指導内容を満たしている。

以上、『師範器楽』は、易から難へと進む練習

曲の配列になっている点、「師範学校教科教授及修練指導要目」で規定されている予科第2学年の指導内容がほぼ含まれている点から、「初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度マデ進マシム」内容の教科書と捉えることができる。

譜例1 『初等オルガン教科書』における導入部分

出典 真篠俊夫編『改訂初等オルガン教科書』大阪開成館，1930年，1頁。

第 一 部
踏 板 練 習



右 手 練 習



左 手 練 習



譜例2 『師範器楽』における導入部分

出典 文部省『師範器楽 本科用巻一』師範学校教科書，1943年，3頁。

右 手 練 習



(2) 視点2：ピアノ用の教科書か否か

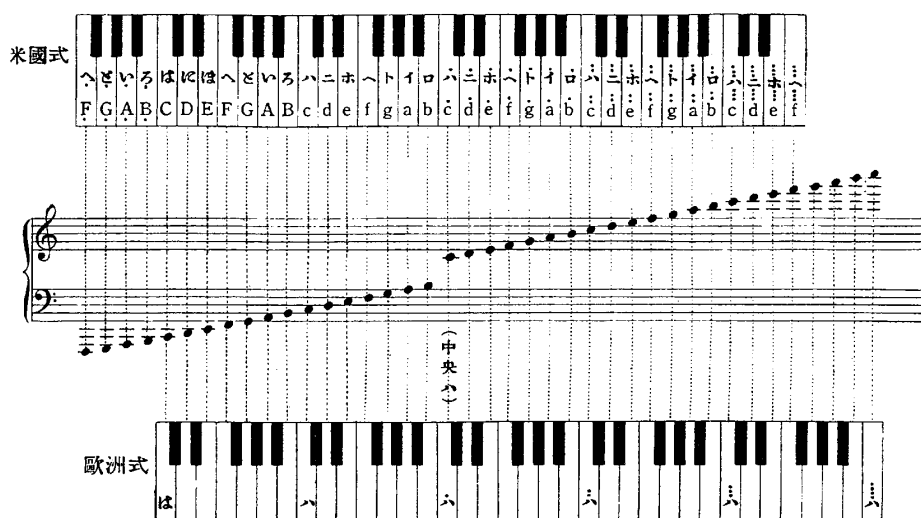
次に『師範器楽』が、ピアノ用の教科書か否かについて検討したい。

『初等オルガン教科書』には、「米国式」と「欧州式」の2種類、いずれも61鍵の鍵盤が掲載されている（図4）。

一方、『師範器楽』の1ページには「鍵盤・音

名・譜表の関係」として 88 鍵の鍵盤が示される(図 5)。2 ページに進むと、「弹奏姿勢図」としてグランドピアノを弾いている男性の写真が掲載される(図 6)。また、『師範器楽』では、『初等オルガン教科書』で所収されていたオルガン演奏に必要な内容は、まったく含まれていない。したがって『師範器楽』はピアノ志向の教科書である。

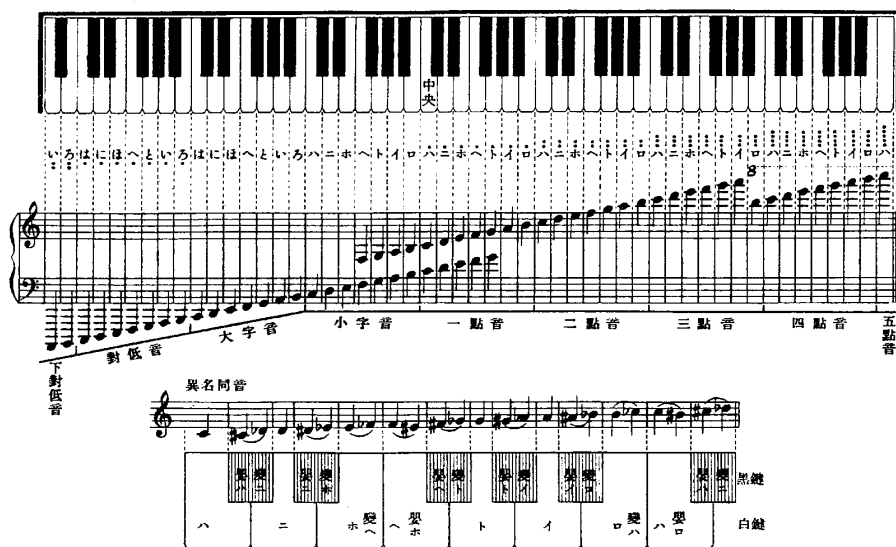
鍵盤と樂譜との對照 (一) 幹音列



出典 真篠俊夫編『改訂初等オルガン教科書』大阪開成館，1930年。

図4 『初等オルガン教科書』における鍵盤図・大譜表

鍵盤・音名・譜表の関係



出典 文部省『師範器楽 本科用卷一』師範学校教科書，1943年，1頁。

図5 『師範器楽』における鍵盤図・大譜表



演奏姿勢図

出典 文部省『師範器楽 本科用巻一』
師範学校教科書，1943 年，2 頁。

図 6 「演奏姿勢図」

練習曲の作曲技法の傾向からみてみたい。表 1
に従って分類した結果は，図 7，図 8 に示す。

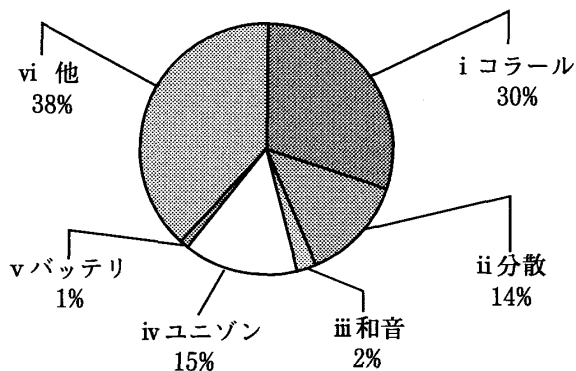


図 7 『初等オルガン教科書』の作曲技法

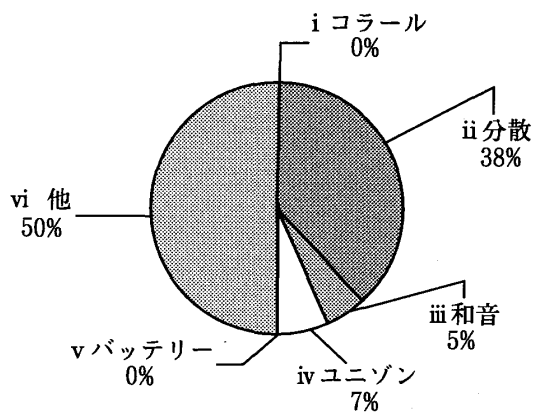


図 8 『師範器楽』の作曲技法

『初等オルガン教科書』(図 7) では 3 割近く
占めていた「i コラール風」のオルガン様式が，
『師範器楽』(図 8) ではまったくみられない。そ
の代わり，『師範器楽』では「ii 分散和音」が
38% 占める。分散和音については，両教科書の巻
末に掲載されている。譜例 3 の『初等オルガン教
科書』では「属七の和音」「は長調主三和音」の
分散和音を取り上げている。しかし，これらは歌
唱教材の伴奏に使用される分散和音の音型とは異
なり，音域が広く指や手首のテクニック習得の要
素が強い。

譜例 3 分散和音

出典 真篠俊夫編『改訂初等オルガン教科書』
大阪開成館，49 頁。



一方，譜例 4 に示したように，『師範器楽』の
巻末にも分散和音を取り上げられている。ここで
は指や手首のテクニックではなく，伴奏型に近い
5 種類の分散和音が掲載されている。ちなみに，
譜例 4 に掲載した「(ハ)」以外の分散和音は，
『師範音楽 本科用巻一』(以下，『師範音楽』と
略記) の「音楽理論」の項でも紹介されている
(譜例 5)¹⁷。その背景には，分散和音は「聴覚訓
練」で重要視されていたので，「器楽」や「音楽
理論」の分野でもくまなく扱われたと考えられる。

譜例4 分散和音

出典 文部省『師範器楽 本科用巻一』
師範学校教科書, 1943年, 54頁。



譜例5 『師範音楽』における分散和音

出典 文部省『師範音楽 本科用巻一』
師範学校教科書, 148頁。

コノコトノ意味ヲ更ニ廣ゲルト分散和音トイフ形ニ進展スル。分散和音トハ、同一ノ和音ノ各聲部ノ音ヲ一音マタハ數音ツツ、時間ヲ別ニシテ響カセルコトヲイフ。ハフトノ和音ヲトツテソノ種々ノ形ヲ示ス。



ところで、国民学校初等科音楽教科書のための教師用指導書には、「伴奏楽器としては、ピアノの方が効果的であることはいふ迄も無いが、オルガンでも奏し得る」とある¹⁸。また、国民学校の音楽教科書の編纂委員¹⁹の一人である井上武士は、「ピアノは教授用、伴奏用楽器として最もすぐれて居る」と、オルガンよりピアノを推奨している²⁰。つまり、ピアノの弾ける国民学校教員が、待ち望まれていたのだろう。

以上、『師範器楽』は、88鍵の「鍵盤図」やグランドピアノを写した「弾奏姿勢図」が掲載されている点、オルガン奏法に関する内容が含まれていない点、「コラル風」のオルガン様式がみられない点、伴奏型に近い5種類の分散和音が掲載されている点から、ピアノ用の教科書であることが明らかである。

3. おわりに

これまでの比較考察を通して、以下の点が明らかとなった。

- 1) 『師範器楽』は「初歩ヨリ始メテ予科二年修了程度」の内容を掲載した本科第1学年用の教科書である。このことは次の点から判明した。
 - ・「右手練習」「左手練習」「両手練習」と易から難へと進む練習曲の配列となっている。
 - ・三連符は使用されていないものの、複合拍子やシンコペーションが用いられ、予科第2学年の指導内容が含まれている。
- 2) 『師範器楽』はピアノ用の教科書である。このことは次の点から判明した。
 - ・「鍵盤図」では88鍵の鍵盤を、「弾奏姿勢図」ではグランドピアノの写真が掲載されている。
 - ・「踏板練習」や「増音器練習」等のオルガン奏法に関する内容が含まれていない。
 - ・オルガン特有のコラル風な作曲技法は用いられていない。

『師範音楽』がナショナリズム、ミリタリズム的傾向が強かったのに対し、『師範器楽』はそのような傾向が強調されていない。事実、敗戦後、多くの国定教科書が墨塗り処分を受けたにもかかわらず、『師範器楽』は使用を許されていたことがそれを裏付けている²¹。

なお、『師範器楽』は国定教科書であったにもかかわらず、知名度は低い。戦後の新制大学の教員養成学部や保育者養成機関においては、『バイエルピアノ教則本』がさかんに使用される。『師範器楽』は戦後の教員養成の方法に影響を与えた

のか否か。このことについては今後の課題としたい。

- 1 文部省『師範器楽 本科用巻一』師範学校教科書, 1943 年。
- 2 木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』音楽之友社, 1986 年, 230-231 頁。
- 3 同声会編集部『同声会報』第 264 号, 1943 年。
- 4 木村, 前掲書, 285-286 頁。
- 5 山本文茂「芸能科音楽教材の特質——教科書・教師用指導書の分析を通して」浜野政雄監修・東京芸術大学音楽教育研究室創設 30 周年記念論文集編集委員会編『音楽教育の研究——理論と実践の統一めざして』音楽之友社, 1999 年, 293 頁。
- 6 西村和子「バイエルピアノ教則本についての一考察」『山口女子大学研究報告』第 7 号, 山口女子大学, 1981 年, 63-68 頁。西村は、『バイエルピアノ教則本』の形式について, 「一部形式・二部形式・三部形式が圧倒的に多く」(68 頁) と分析する。
- 7 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943 年, 163 頁。
- 8 赤井励『オルガンの文化史』青弓社, 1995 年, 242 頁。
- 9 高折宮次・真篠俊雄編『初等ピアノ・オルガン教科書』大阪開成館, 1936 年(昭和 11 年 11 月 30 日, 文部省検定済)。「緒言」は以下の通り。「本書は師範学校・女子師範学校・高等女学校及び実業学校のピアノ又はオルガンの教科用に充てんがために編纂したものである。本書はピアノ並にオルガンの初歩の課程を会得せしめんがためにバイエル, ラインハルト, チエルニー並びにダム等の教則本中よりピアノ又オルガンに併用して不都合なく且つ奏法の一般技術を会得せしめんがために重要な楽曲を選び之に興味ある材料を加え無味乾燥にして厭倦を起さしむることのなき様配列せり。本書中に選びたる楽曲はピアノ又はオルガンの専門的見地より見れば極めて初歩たるのみであるが学習者は幸ひこれを以て階梯とし其の門に入り其の堂に上ることを得ば編者の本懐とするところである」。
- 10 三国谷三四郎編『京都府師範学校沿革史』京都府師範学校, 1938 年(第一書房, 1982 年復刻版使用), 205 頁。
- 11 香川県師範学校音楽科教員であった金光武義氏(現, 岡山大学教育学部名誉教授)は, 『初等オルガン教科書』を所持し, それについて「香川県師範学校で使用していた教科書であった」と証言する。なお, 筆者は 2003 年 10 月から継続的に金光氏と聞き取り調査を実施している。
- 12 比較対象は次の通り。『初等オルガン教科書』: 両手練習以降の 1 番から 87 番までの全 87 曲。「附録」として掲載されている儀式唱歌は含めない。『師範器楽』: 両手練習以降の 3 番から 78 番までの全 76 曲。
- 13 山本, 前掲書, 293 頁。
- 14 《君が代》《一月一日》《紀元節》《天長節》《明治節》《勅語奉答》(2 種類)。いずれも歌詞は付いていない。
- 15 30 番:《霞か雲か》『小学唱歌集二』1883 年(D→Gへ移調), 51 番:《庭の千草》『小学唱歌集三』1884 年(E→Gへ移調)。
- 16 島崎赤太郎『オルガン教則本』巻(1926)は, 「踏板練習」で始まり, 「右手練習」7 曲, 「左手練習」7 曲の後, 「両手練習」へと進む。
- 17 文部省『師範音楽 本科用巻一』師範学校教科書, 1943 年, 148 頁。分散和音について次のように定義されている。「分散和音トハ, 同一ノ和音ノ各声部ノ音ヲ一音マタハ数音ツツ, 時間ヲ別ニシテ響カセルコトヲイフ」。
- 18 文部省『ウタノホン上 教師用』日本書籍, 1941 年, 19 頁。他の学年の国民学校初等科音楽教科書のための教師用指導書にも同様の

記述がみられる。伴奏については次のように記されている。「伴奏は、歌唱の誘導補佐の任に当るばかりで無く、和音訓練及び聴覚訓練等と密接な関係があるから、常に正しく奏するやうに心掛けなければならない。教師は、先づ児童の歌唱に耳を傾け、伴奏の強弱緩急等を明確に表現することが肝要である。伴奏は、従来ややもすると軽視される傾向があつたが、国民学校の音楽教育に於ては、之を重視する必要がある」。

19 井上武士「教材・教科書にみる明治 100 年の歩み」『音楽教育研究』4，音楽之友社，1968 年，57 頁。

20 井上武士『国民学校芸能科 音楽精義』教育科学社，1940 年（1941 年重版使用），329 頁。
下記のように記されている。

（イ）ピアノ

ピアノは教授用，伴奏用楽器として最もすぐれて居る。その理由は次の如くである。

（1）ピアノの音は明快で児童の心情に適する。

（2）ピアノは断音的で，リズムや音程を明瞭に表現することが出来る。

（3）唱歌の伴奏楽器としてピアノは最も簡易であり，好適である。（多くの唱歌曲の伴奏譜はピアノ用として作られてある）
竪型（アップライト）よりも平型（グランド）の方が，児童の管理上からいつでも，又演奏上からいつでも好適である。

高いもの程良いといへるが，大体二千円内外位で適当なものが得られる。

（ロ）オルガン

時によつて教授上，又は伴奏用としてオルガンも使用したい時があるから，之も必要である。大体三百円内外で適当なものが得られる。

21 「国民学校・青年学校・中等学校・師範学校及び青年師範学校において使用する教科用図書に関する件」1946（昭和 21）年 7 月 20 日，

地方長官，各学校長宛，教科書局長（発教八七号）。「但し実業学校学科教科書及び師範学校の器楽の教科書に限り追て何分の指示ある迄は従来の通り取扱つてよろしい」（石川謙代表『近代日本教育制度史料』第二十五巻，大日本雄弁会講談社，1958 年，311 頁）。